

序論

雑誌名	日本の語り物 口頭性・構造・意義
巻	26
ページ	1
発行年	2002-10-31
その他のタイトル	Preface
URL	http://doi.org/10.15055/00005358

第1章

語り物の概念化へむけて

時田 アリソン

- 1 語り物の機能と意義
- 2 研究の概要
- 3 口頭性
- 4 語り物の構造
- 5 語り物と歌い物の接点
- 6 論文紹介
- 7 研究の成果

1 語り物の機能と意義

近代国民国家は「想像の共同体」(Anderson 1983)である。文化的なシンボルにより、人々が結ばれ、国家となる。そのシンボルは国旗や国歌などだけでなく、スポーツやテレビ番組のような文化活動も含まれる。しかし、近代以前にも、共同体は、共有された神話・伝説・物語によりつくられた。日本でもそのようにして共同体は形成されたが、語り物はそこで大きな役割を果たしただろう。語り物としてひとびとのあいだで語られた物語や神話は、文字をもたない人々の宇宙観・世界観を内包していたからである。

ここで、語り物の定義をかんたんにしておこう。語り物は、日本の芸能用語として通用しており、本論集ではそれを踏襲して、職業的な「他者」が、叙事的な詞章に節をつけて語る、ふつう伴奏楽器を伴う声楽曲、と定義する。英語にすれば、musical narrativeである。この定義とは別に、第2章では蒲生郷昭が音楽学の立場から明瞭に定義を示している。また、語り物を「口頭で演じられる」もの(兵藤1997:11)とすれば、英語ではoral narrativeということになる。こちらは音楽的な要素を持たない語り芸を含んで、より一般的である。しかし、音楽面の非常に発達したものが多き日本の語り物を定義するには、十分ではない。ここから、日本の語り物が世界の語り物の中でどんな位置を占めるか、という研究課題が出てくる。

オーラルナラティブは、世界のあらゆる文化・社会に存在する。あるいは存在した。なるほどヨーロッパでは目立ちにくいだが、バルカン半島、ベラルーシ、フィンランドなどには現在まで残っているし、文学作品として評価されるベオウルフ、アーサー王伝説、エル・シッ